

ペシャワール会報

No.35

ペシャワール会
〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二



- 見捨てられるアフガン民衆..... 中村 哲
- 不思議な安心感を覚えて..... 豊崎朝美
- 人間の寿命は神様が決める..... 長谷川昭一
- 予想外のことが多いけどぼつぼつやっています..... 倉松由子
- 入院できる患者はまだ幸せ..... 藤田千代子
- 本当はそんな言葉は聞きたくないんだよね..... 沢田裕子
- ペシャワールの地を訪ねて..... 事務局
- 継続的支援..... 香住ヶ丘バプテスト教会, 福岡YMCA
- 会員の皆さんからのお便り

アフガンの冬*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

見捨てられるアフガン民衆

カブール92年11月

JAMS (日本アフガン医療サービス) 顧問医師 中村 哲

昨夜来の雪でカブールは純白に覆われていた。すがすがしい大気と雪の白装束が、全ての愚劣な人間の行為と悲惨をくんでいるように思えた。だが、市内の実情を知る者は、この白さが死装束に見えたことだろう。厳冬を直前に控えて、飢餓が、最低二〇〇万とも云われる市民・「国内難民」の足元に忍び寄っていたのである。

冬を前に絶望的状况……………*

一九九二年十一月二十日、私はアフガン人に扮して早朝ペシャワールを発ち、二十名のJAMS (日本アフガン医療サービス) スタッフと共にカブールに入った。JAMSは、一九八六年に結成以来、現地スタッフの育成に力を注ぎ、内乱によって荒廃したアフガニスタンの復興に医療側から支援すべく待機してきた。現在八十六名の現地スタッフを抱え、

九一年十二月から国内診療所を開設、本格的な活動を開始した。

一九七八年十二月のソ連軍介入以後、実に十四年に互る内乱で国土が荒廃し、約二百万の死者と六百万人の難民を出したことを記憶する者もあろう。一九八八年、ソ連軍撤退で沸いた世界は華々しい「難民帰還・復興援助」を知らされたが、巨額を浪費したあげく、実は不発のまま事実上幕を閉じかけていたのである。

昨年四月のカブールの政変劇の後、パキスタン・北西辺境州に逃れていた二百七万人の難民は殆ど独力で爆発的に帰郷し始め、現在まで約半数の百数十万人がアフガニスタンに戻ったといわれる。これに合わせて、我々JAMSのアフガニスタン国内活動も飛躍的に拡大し、今春の第二波の大量帰還を予測し、初期の目的どおり「農村無医地区のモデル診療態勢作り」は着々と進行している。



雪の降りしきるカブール市内に立つ中村医師とシャワリ医師

だが、夏までに帰郷して何とか冬越しの食糧を蓄え得た農民はまだ良い。現在最も苦しんでいるのは、難民にさえなれなかった都市への避難民、特にカブール住民である。実情を見てこれ程ひどいものだとは思わなかった。ごく一部を除いて、水・電気はおろか、燃料や食糧の絶対的欠乏のために物価が高騰し、冬を前に住民の状況は絶望的に見える。

カブールを始めアフガニスタンの高地では冬が厳しく、通常でも人々は越冬用の食料と暖を取る薪は欠かせない。だが、WFP (世界食糧機構) や UNHCR (国連難民高等弁

務官事務所)も様々な事情で補給を停止、手をこまねくのみである。また、ガソリンもないので、バスが動かず、市民の足は奪われている。病院では国際赤十字から支給された薬品が僅かに残るだけで、到底まともな診療が可能とは思われない。

都市機能は完全に麻痺に陥っている。日が落ちると全市は闇に包まれ、各政治党派の「分割占領」と抗争のため市街戦さえ演じられ、市民は脅えている。北部に拠る非パシュトゥン系、とくにウズベク人を主とするドスタム派、中央山岳地帯に拠るハザラ系、パシユトゥン族を背景とするイスラム党の軍民が割拠、主な街角には銃を背にした若い党派の兵士が検問し、市内の通行もままならなかった。日本を含め各国大使館は全て閉鎖されており、外国人ジャーナリストは皆引き揚げたと聞いた。人々が旧ソ連アフガン政府の崩壊した後に見たものは、別の政治スローガンを掲げる新しい暴君の抗争、生活の窮迫、無政府状態、そして確実に迫りくる飢餓地獄であった。

JAMSのみが活動.....*

問題は、本当に復興支援の必要な今こそ、

援助プロジェクトが次々と閉鎖または縮小している事である。少なくとも保健医療分野では、東部アフガニスタンにおいて実質上ひとりJAMSのみが活動していることを誰が信じ得るだろうか。「日本」の名を背負い、その良心である事を願う我々は、この事実を誇る以前に、あの華々しかった「アフガニスタン復興援助」の寒々とした顛末に呆然とする。このため、JAMSの診療数は四月から九月までの上半期だけで五万名を突破して過剰な負担にあえぎ、日本側の小さな協力団体であるペシャワール会を通し、必死の補給で辛うじて回転しているのが実情である。

「復興協力」はオリンピックとは違う。喝采を競う参加の実績が問題ではない。過去の失敗は問わぬ。援助の稚拙さは問わぬ。「国際貢献」を錦の御旗にして「カンボジア」に人々の関心が集中している今こそ、巨費を投じたアフガニスタン復興援助の結末を謙虚に総括し、「人道的援助」の名に恥じぬ誠意を行為で示すべきではないのか。そうしてこそ、日本は真に国際的尊敬を勝ちうる筈である。

確かに救援すべき所は世界中無数にあるろう。しかし、それは総論で器用に論ずべきものではない。一つ一つの現実的にかかわりから糸口

を見いだすべきものだ。罪のない膨大な人々が餓死・凍死の寸前にあるのに、大方の外国救援団体が活動停止を余儀なくされる中で、せめて我々JAMSペシャワール会だけは、現地と命運を共にし、以て日本の良心の証しとなろう。やがて冬が過ぎ、春の希望が共有できる事を心に祈るばかりである。

(本稿は一部改稿の上「朝日新聞」(一九九三年三月九日)に掲載された。)



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション病院に赴任。らい

のコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS(ジャバン・アフガン医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創作をめざしつつ現在に至る。著書に『ペシャワールにて』(石風社)『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

ワーカー通信

不思議な安心感を覚えて

事務局 豊崎朝美

今回、三月にペシャワールへ事務の仕事で行くことになりました。よろしくお願ひします。

約十年前、ひとりであらりとケニアへ行き（これが私の初めての海外旅行でした）。語学学校へ通ったり、旅行したりと六ヶ月程滞在していた時、あるNGOから派遣されて、ケニアで活動しているワーカーの人達数人と知り合いました。彼らと色々話していると、「がんばっているな」と彼らを賞賛する気持ちと同時に、数年毎に人が入れ替わる事に対する漠然とした疑問を抱いたのです。

海外でのボランティア活動というのは、こういった形の物なんだと自分自身を納得させようとしたけど、なんとなく納得しきれない部分が残る、その後帰国して目についた海外援助活動に関する本や新聞記事等を読んでも、

ケニアで感じた疑問は心の中で消える事がありませんでした。

そんな状態が続いている時、中村先生のペシャワールでの活動を知り「あっこれだ!」と、嬉しくなりました。現地の人々に活動を理解され、受け入れてもらい、さらにその活動を継続して行なうには、当然時間がかかり、そのためには人が入れ替わる事なく、その土地に根をおろす必要がある。けれども、今の社会構造の上では、具体的な行動に移すのはむずかしく、もしかしたら、こういった長期的な海外援助活動をしたと考えている人が大勢いるのかもしれないけど、それができない現実をそのまま受けられている人が大多数ではないでしょうか?

中村先生の活動を知って、私の中にあつたなんだかもやもやとしたわだかまりが何だったのか、具体的な言葉として表われ、そして、それを行動に移している人が存在する事を知って、不思議な安心感をおぼえました。ちょうど、どうしても解くことができなかった数学の問題を、色々な方程式をこねくりまわし、時間をかけてやっと答をだした時感じるそんな思いでした。

今、出発の前に、ペシャワールでの生活、JAMSでの仕事、「自分はやっていけるのかな?」といった不安感、それとは別に、自分の知らない世界に対する、ちょっとわくわくするような気持ち、等々……様々な思いが心の中に表われては消え表われては消えて、毎日が過ぎていきます。

そして、ペシャワール会の事務局員の人達には、忙しい時間の合い間をぬって、色々なアドバイスしてもらったり、また準備にあたり、現地に必要な技術的な面のトレーニングのため休日を返上して時間を作ってもらったり、スタッフの人達の暖かさを感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。

それでは、ペシャワールに行ってきます。

人間の寿命は神様がきめる

医師 長谷川昭一

今年は例年になく寒いようですが、ペシャワール会の皆様お元気でしょうか。こちらも半月前位からストープを出しています。

さて、現在主にミッション病院らい病棟に

勤務し、週二回はJAMSに顔を出していません。何も分からないまま飛び込み、あつという間に過ぎてしまったというのが実感です。らい病棟の方は、冬に入り徐々に入院患者が増え忙しくなってきました。言葉の問題、システムの違い、私自身の経験不足もあり、不安が大きいです。患者さんの笑顔に励まされ何とかやっております。

こちらへ来て早々、あるおばあさんが入院して来ました。五日間も高熱が続いていて、ぐったりしていました。できるだけの治療をしましたが、様態は悪くなるばかりです。息子さんに来てもらい、状況が非常にきびしいことを話しました。その際は、「人間の寿



JAMSスタッフにエコーの指導をする長谷川医師

命は神様が決めるものであって、我々がいくらあがいてもそれを変えることはできない。だからすべてあなた達にまかせます」といったのでした。幸いその後彼女は回復しましたが、非常に印象的な出来事であったことを覚えております。

JAMSの方は病棟回診についています。日本では見られない熱帯病や教科書でしか知らなかった疾患も見られ、勉強になっています。また先日から、午後の時間を使って腹部エコー検査の指導をはじめました。戦乱によりいままです研修の機会がなかったアフガン人ドクターのため、少しでも刺激になったらと思えます。

予想外のことが多いけど
ぼつぼつやっています

ミッション病院
理学療法士 倉松由子

ペシャワールに来て二ヶ月がたちました。

未だに、朝病院へ出かけていくとき、今日はどんなことが起こるんだろうかと思う毎日です。

例えば、ある朝のミーティングで、パキス

タン人のクリスマスチャンスタッフが突然お祈りを始めたので何かと思ったら、後で新聞を読んで、司教が誘拐されてその無事解決を求めお祈りだったことがわかった。司教は後で身代金を払うことなく戻ってきたが、このクリスマスチャンたちは自分たちの宗教に対する何らかの圧迫を受けとって、ミッション系の学校・病院などの施設は一日ストライキを行った。

また、朝一番にみんなでやる包帯交換では、子どものこぶし程に化膿してふくらんだ足趾のおじさんが手当てを待っていたり、患者の猛烈な口げんかがあったりする。らい菌検査のため、私が慣れない手つきで耳たぶをメスで数ミリ切開して皮下組織を採ろうとしたら、ひげもじゃの大男がこわがって貧血をおこして気絶しそうになったこともあった。

女の患者さんたちも様々だ。大声で怒って、泣いて、笑うおばあさんがいて、彼女のパシエトゥ語はわからなくてもその表現の盛大さに魅せられて写真を撮ろうとしたら、途端に口唇を結んで無表情のポーズをつくってカメラにおさまろうとした。また、針仕事をしていたおばさんに、針と糸をかして下さいと頼んだら、染みのついた古い包帯をほぐして三本の糸をとってつばで湿らせ、その一端を足

の親指に巻きつけてピンと張らせてから器用に縫って、目の前で一本の縫い糸を作つてくれた。

「息子にらしい病だと知らされたら殺されてしまう。」と泣き、三日かかっても単純な運動訓練と一緒にできない(他人の動作を見て、そのままをするのが難しい)おばさんに、つい口うるさく説明してかえって逆効果かなと心配していたら、何とその息子が見舞いに来て、おみやげのみかんを一口笑顔の彼女がもつてきてくれたこともある。

日本で考えるような、ある状況があつて、それから多分こうなるだろうということが、ここでは予想外のことが多い。

そんなわけで、これから学んでいかなければならないことはたくさんあるし、現地のことばを覚えるのもまだまだですが、現在直面していることがそれぞれ一つ一つ強烈・鮮明で、以前の失敗をよくよしている暇がなく、先のことを心配する気にもなれず、ぼつぼつやっています。

ペシャワールでは、生きのいい野菜や果物が豊富で、食べ物には不自由しません。またお金を出せば、エアコン、全自動洗たく機、電子レンジ、ビデオなど大ていのものが買えます。でも文明の利器はできるだけ少なくし

て楽しく暮らしていきたい感じがします。

三年目の藤田さんから、「回りに感心ばかりしていないで、早く猫の手にでもなつて下さい。」と言われるでしょうか。

入院できる患者は まだ幸せ

ミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院所属

藤田千代子

ペシャワール会の皆様、お元気ででしょうか。あつという間に、二ヶ月あまりが過ぎよう

としていてびっくりしています。ペシャワールは、菊の花が咲き始めています。私達の家の庭には、スイトビーの芽も十センチ位に伸びてきました。香りのない菊の花ですが、やっぱり日本を思い出します。さて、ミッション病院のらしい病棟では、長谷川先生、栗林看護婦さんをむかえて、患者さん達のうれしい顔があります。スタッフ達も以前からすると活気があり、私たち日本人が少なからず刺激しているのかも知れないなあと感じています。冬をむかえ、患者の数も日々増えて来ます。足底潰瘍のある人が多く、同じ顔ぶれの入院患者をみているとらいついての患者

フィールド・ワークで子どもを診る藤田さん



への教育というか、説明がいかに大切なのかということが最近わかって来ています。

十月末に、四日間の予定でデイルというペシャワールから遠くにある地区へフィールドワークに行きました。女性の患者の家に行くと足背に約七センチ×四センチ程の大きな傷があり、痛みがないことを幸いに包帯もせず、日常生活を送っているのです。もちろんこの患者が病院へ来たならば、毎日包帯を交換し、薬を渡し治療を受ける事が出来ます。しかし、この患者に、ペシャワールの病院へ来なさい、と言えませんでした。それはこの患者にとつては、自分の足の傷よりも、生活の方が大きな問題なのです。小さい子供四、五人と年老いた夫をかかえての一日一日の生



募 集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSとミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々をの便をを図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。
- ② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。
- ④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）
詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440〔分室〕

活が大切なのです。
左手の指は、母指が一本ひよろつと残っているだけでした。右手はまがったまま、かたく固まっており、農作業をしているせいであかぎれになる寸前のかたさです。私に出来た事と言えば、そのかたい手を毎日きれいに洗って油をぬる事。足も同様にする事を話すだけでした。突然外国人が来て傷の手当について話すだけでは、忙しい生活もあり、言ったとおりにはしないだろうなあと、その傷の行方と患者のこれからを考えながら重い気持ちで次の家へ向かいました。

次の家でもやはり足に傷を持っている患者がいました。この人は、らいについては薬の治療が終わっている患者です。感覚障害が残

っているため、らいの治療は済んでも傷をつくる可能性は大いにあるわけです。
泥がいっぱい入った靴を脱ぐと異臭を放つのですが、泥に汚れた足底はどこに傷がありどれ位の大きさなのかはわかりません。でもこの臭いからするとひどい傷だろうと予想されます。
この家庭は、貧しいながらも子供は成人しており、患者は家をあげ病院へ来れるとの事で必ず来院するよう話して、私達は帰りました。

今、ミッション病院にこの患者は入院しています。ひどかった傷は、あつという間に良くなりつつあります。このフィールドワークで感じたことは、入院する患者の顔ぶれがだ

いたい同じということとはたったひとにぎりの患者しか病院へ来れない状態なのだろう、そして、入院する為、家をあげられる患者はまだ幸せな方なのだろうという事です。そして、入院している間に私達が患者に対して何をすべきか、それがこの人の生活にどうつながるか少しづつわかってきたような気がします。
それから、パキスタン人の中に、らいの患者を早く見つけ、治療を受けさせたいと一生懸命頑張っている人達がいる事を一緒に行動して、とても嬉しく思いました。

本当はそんな言葉は聞きたくないんだよね

●三度目のペシャワール②

ペシャワール会事務局 沢田 裕子

前回は、JAMS（ジャパン・アフガン・メディカル・サービス）の話を中心に報告しましたが、パキスタン北西辺境州におけるレプロシー・コントロール・プログラム（ハンセン病根絶計画）も大変に重要な活動です。昨秋のペシャワール訪問では、この活動のひとつフィールドワークに、北西辺境州全体の同計画責任者ムラー氏や看護婦の藤田さんと同行することができました。

辛抱強さと悠長さ

ペシャワール・ミッシヨン病院がらいの集中治療センターとすれば、このフィールドワークは北西辺境州に点在するらしい診療所を拠点として行われる、患者発見・施薬・社会福祉の出張サービスと言えるかと思えます。

と書くのは簡単ですが、日本とは比較に

ならないほどの時間と労力と辛抱強さを要する仕事なのです。今回のフィールドワークは四泊五日の旅でしたが、その間訪ねることのできた患者の家は二軒というところ少し理解していただけるでしょうか。



フィールド・ワーカーのムラー氏

まず、ペシャワールを朝出発し、今回の目的地ディールに到着するまでに延々とドライブ。やっと到着した頃には薄闇が始まっており、それから山道を登って患者の家まで行くのは無理（中腹まで車で行けても途中からは歩かなければなりません。所用時間は大体片道一時間から二時間）なので、その夜の宿舎となるディールのらい診療所へと向かいます。男女別々の棟で食事をし、第一日はこれで終りです。夜の早いフィールドワーク、二週間の休暇をとるためにバタバタと仕事を片付けてきた身には、有り難い習慣でした。

翌日、朝食を終え、おもむろに昨夜訪ねられなかった患者の家へと出発します。「何時出発」と決めるでもなく、流れにまかせると言う悠長さは、日本人にとっては時に堪え難いものとなるようです。でも、郷に入っては郷に従え。私などは逆に日本の慌ただしさの方が堪え難いと思うのですか……。

患者さんは畑仕事

さて、でこぼこの山道を一、二時間ほど車で登り、あとは徒歩で三十分ほど歩いた

でしょうか。やっと患者の家に到着しました。しかし当人は畑仕事に出掛けており、彼の帰宅を待たなければなりません。その間、藤田さんと現地の女性らい診療員ナイラが家族の女性たちにコンタクト・サーベイ（接触調査）を行います。女と子供だけ階下の別室に行き、家長である患者の病気が家族に感染していないか、服をめぐって体中をチェックするのです。この日、感染者は一人もありませんでした。

二時間ほどしてやっと患者が帰宅してきました。早速ムラー氏が彼を診察してみると、視神経をらい菌におかされ、片目を失明。足底潰瘍も清潔を保っていないかったために悪化しており、ミッシュン病院への入院を決めました。これ程の症状なのに、農作業を続けており、歩いて半日かかるといふ診療所へも行っていないという状況で、これだけでもいかに患者さんを発見し、投薬・治療を継続するのが難しいかが想像できます。

もう一軒訪ねた家でも農作業に出掛けており、しばらく待ちましたが戻らないので下山。残りの二日間でもうひとり女性患者と、ピールババ（聖人の廟がある名所で、

その周辺にらい患者の共同体と診療所がある）を訪ね、今回のフィールドワークを終えました。

驚くような安月給

通信網・交通網が発達している日本から見れば、一見非効率で無駄が多いように思えるかもしれないこのフィールドワーク。けれど、新患者ことに女性患者の発見・登録や、遠くペシャワールはおろか各地のらい診療所にさえなかなか訪ねて行かない、あるいは訪ねて行けない患者さんたちへの施薬・治療および社会的ケアという点で欠かせない、地味ながらも大変重要な仕事なのです。

そして、この仕事を支えているのがムラー氏はじめ、各診療所に常駐している診療員さん達です。彼らは皆、同計画実施初期から働いてきた在職二十年、二十五年といったベテラン達ですが、いわゆる難民ビジネスの恩恵を受けることもなく、本当に驚くような安月給で働いています。

以前長期にペシャワールで働いたとき、彼らの家に招かれた事が何度かありますが、その質素な暮らしを見て、当時多数あった

ペシャワールのアフガン難民関連事業に入されている巨額の資金を思い、何か割り切れない思いがしたのを覚えています。

藤田さんの役割

最近では、藤田さんがこのフィールドワークに加わるようになり、ムラーさん達は随分と心強い思いをしているようです。パキスタンの女性患者発見率は一三%と国際平均の三〇数%に比べ極めて低く、男女隔離の風習の影響と見られています。そんななか、現地語を理解し女性を診ることのできる彼女の存在は今後益々大きな役割を果たしていくことになるでしょう。

「サワダさん、今まで色々な国の人達がたくさんやって来て僕たちのフィールドワークに同行しては『よかった』『興味深かった』と言っては帰って行ったけど、僕は本当はそんな言葉は聞きたくないんだよね。」

見て、感じて、それだけでは何の意味もない。具体的な活動を継続して行かなくては。日頃物静かなムラーさんの言葉を聞きながら、どこか遠足気分だった自分を少し恥ずかしく思いました。

●ペシヤワールの地を訪ねて

フィールドワークに同行して

事務局 舛井誠一郎



今回は、フィールドワークに同行することになり、「これは大変なことになったなあ」と少々ビビっていましたが、

五日間は本当にアツという間に過ぎ、「楽しかった」というのが申し訳ありませんが私の感想です。

場所はペシヤワールの北東、車で約四時間、聖人の廟があることで有名なピールババという所で、ここにお住いの州政府のレプロシテクニシャンであるスルタン氏のお宅に寄宿させていただき、ここを基地に周辺地域を回りました。感想等を正直に書き連ねてみます。一、移動は全て車ですが、道路事情は悪く崖っ淵はあたり前、時には川を渡ることもあり。しかし車が入れる所はまだ良い方なのだろう。

二、ピールババに着いた日の夜、一週間続いたという停電が復旧した。電気がなくてもどうにかなるというのは素晴らしいことだ。

三、みんな早寝早起きです。私達も夜八時から九時には寝ていました。

四、朝食に出てくる揚パンと目玉焼きがやたら美味しく忘れられない。

五、三日目は大雨で外に出られず、スルタン氏のたくさんのお孫さんのおもちゃになってしまったのですが本当にみんなかわいいがき共でした。

六、びっくりしたこと。あるらしい患者さんの家へ行くと思者さんは亡くなったらしい。聞けば親類間のもめ事で射殺されたとのこと。そう珍しいことではない………らしい。

七、そろそろ本題に入ります。藤田さんと一緒だったので、女性でないと診れないことがかなりあり藤田さんは貴重な戦力なのですが、どうにかして現地の女性スタッフを育てることは出来んのだろうかと強く思いました。まあ問題のあるのは解っておりますが。

八、こう書くで大変失礼なようですが、スルタン氏はじめ現地州政府スタッフのみならずいろいろな問題を抱えながらも本当にがんばっておられました。一生懸命やっているとわけていたわけでは決してなく、これまで私の頭の中にミッシェン病院やJAMSのことはあっても州政府の方々のことがなかったのです。特にお世話になったス

ルタン氏、口の悪さときついジョークが玉にキズですが、その旺盛な好奇心と行動力（憎めない人間味も）には本当に頭が下がります。そしてこの北西辺境州政府とペシヤワール会のよい関係を大事にしていきたいものだと思います。

三年ぶりのペシヤワール

事務局 馬場雅文

『ペシヤワールにて』（増補版）の表紙は、一九九〇年一月のある日の午後には撮られたペシヤワール近郊のアコラハタック難民キャンプの写真である。

あの日から三年ぶりのペシヤワールだ。「正月休みにまた行かんね」というワラカジ（梶原氏）の誘いに、またもやあつけなくのってしまう私である。福岡から北京へ飛び、二〜三日過ごしてそこから成田発カラチ行のPIA機に乗り込み、パキスタンではスワート渓谷で鯉釣りをしようというなかなかの計画である。

前回のPIA機には、離陸の振動で天井から荷物入れの棚が落ちてきてど胆を抜かれたが、今回は最新のA300飛行機で、快適、安心の飛行のうちに、やがてイスラマバードの夜景が眼下に見えてきた。陳腐な形容だが、宝石箱をひっくり返したようなと言いたくな

馬場さん(左)と樋口さん



る夜景である。イスラマバードのフラッシュユマンズホテルで一泊し、翌日ペシャワールへ向かった。

ペシャワールは、そのひびきが好きだ。それを知る前

は、ペルシャを連想して、中近東のどこかの地名だと思っていた。アレキサンダー大王の遠征やクシャン王朝時代を語るまでもなく、今も確かに、文化的宗教的にそつちに繋がっている。インド世界の端ではなく、こういう言い方はないかもしれないが、ペルシャ世界の端という感じのする町だ。

ミッシェンホスピタルを訪れた翌日、僕たちはスワート渓谷へ出かけた。そこへは、ヒンズークシユなど背後に続く山塊の最初とつかかりであるマラカンド峠を越えて行く。峠は海拔八三五メートル、ジグザグに登るのではなく、常に右の車窓からガンダーラ平野を望みながら、山を斜めに大きく回り込んで登って行く。峠の向こうは、その呼び名からの想像とは違ってかなり広い盆地で、畑や果樹園が続いていた。降り出した小雨の中を車で走りながら、日本の風景に似ているなど思ってい

ると、同行の熊本県人達は阿蘇あたりの景色だと言った。

サイドシャリフのセレナホテルに部屋をとって、ミンゴラへ。ペシャワールから北西に約一八〇キロ、スワート渓谷の中心地である町へ入れば、まずバザールでございる。通りに面したチャイハナで、色も味も日本のお茶によく似たカワチャイを飲む。とりあえず近くのプトカラ遺跡を見に行くことになった。

道案内の標識がなく、近くの人に「プトカラ、プトカラ」と連発し、三回程違う方向を教えられて右往左往しながら何とか探し当てると、予想もしない畑の先にそれはあった。そのたずまいは遺跡然としていたが、どういう遺跡かはよくわからず、そのほば中央部にライオンらしき像が風化してさびしげにポツネンとたっていた。

ところでスワート川の鱒なのだ。川はいかにも魚がいそうな気配をただよわせていた。ワラカジはわざわざ福岡から竿を持参してきたが、しかし鱒は釣れなかった。一同、雨に打たれながら、鱒の養殖場へと向かったのであった。

インダスの流れのように

事務局 樋口博子

昨年十二月二十八日から一週間という短さ

ですがペシャワールの現地を見学させていただきました。

イスラマバードには、JAMSのシャワリ先生にわざわざお出迎えをいただき深く感謝しております。JAMSの車にある赤新月と鳩のマークを見たときは、「うーん、これだ」ととてもうれしくなりました。

ペシャワールへの途中インダス川とカーブル川の合流点を通りますが冬のやさしい日射しの中でインダスは水量も少なく静かに流れていました。久しぶりの再会です。もうこの辺からはアフガニスタンと同じような地域であり、国境というものを考えさせられています。

まず日本人ワーカーの方々の一日を話したいと思います。朝は朝食後八時三十分までにミッシェン病院に行き、ミーティングの後、らい患者の人たちの傷の消毒、角質化・腐敗した部分の除去、包帯交換等があります。次は動きにくくなった手足のリハビリ。リーダー格の患者さんを中心に、大声で歌うように数をかぞえながら一生懸命に手を動かしている様子はとても楽しそうにみえました。また各室の患者さんの診察や手術、救急患者医療等が行われます。

この間昼食は宿舎にもどってとられています。夕方は宿舎の前の大きな木に無数の鳥が集まってうるさいくらいにさえずる頃帰宅して少し休息、それから夕食の準備、お風呂の準備、洗濯、読書、書きもの等々。毎日停電

と断水があり、それがどの位続くのか解りません。ローソクやヘッドランプの下でお米の石を除いたり、何かをテキパキとされます。電気がなければ炊飯器もワープロもお風呂の湯も使えません。「あー、どうなるのかしら」と私は寝ころんで街のざわめきやコーランの声を聞いていましたが、ワーカーの方々の生活の大変さを思うと、これらのことを自然に受け止めたように過ごされている姿に感動し、何かすばらしいことがここで行われているんだとこの場に居合わせている喜びでいっぱいになりました。ペシャワール会員の一人一人の思いが今、パキスタンやアフガニスタンへと大きな流れを生み、インダス川のように動いているのです。

JAMSの女性診療日にも見学させていただきましたが早朝から多くの女性や子供が集まります。シャワリ先生をはじめとする現地スタッフによって、きちんとした診療が夕方まで続くのです。待ちきれない母親が子供の様子を私に話してきますが、私はドクターではないと言わざるをえず、もっと多くのワーカーの必要性を強く思いました。この多くの人たちの信頼を断たないように、この先も永くペシャワール会の活動が続いていくことを願っています。私も少しずつ、ながくペシャワール会に参加していこうと思えます。今年、何かよいお年玉をもらってしまいいました。

時には少し高いところから見つめ直して

事務局 梶原泰治

パキスタンの北の玄関イスラマバードからペシャワールへ向かう道沿いにアトックという街があります。この街はずれにあるムガール朝の廃墟から、インダスとカーブルの二つの河が合流する大きな景色を見おろすことができます。この大河に架かる鉄橋を渡ると、アフガンの人々が多く暮らす土地北西辺境州に入ります。

この州の都ペシャワール周辺で難民となつて暮らすアフガンの人々は、三年前には三百万人に上っていました。シャワリ医師によると最近その半数近くがそれぞれの故郷に帰っているとのこと。

アフガンの首都カーブルでは未だに小競り合いが続いているようですが、ドラエヌールなどの農山村部では難民となつていた人々が続々と帰っているとのこと。

春になり雪解けが進むと人々の帰国の波がさらに激しくなるとみられています。

日本アフガン医療サービス(JAMS)は、昨年からドラエヌール渓谷での診療を開始し、さらに他の渓谷にもう一か所の診療所を準備中といます。昨年のJAMSの診療数は前年の二倍に上っており、長らく医療の恩恵に浴

JAMSのヤコブ氏と
財政について話し合う梶原さん



さなかつたこの地域での医療の拠り所となつています。

数年前まで、ペシャワールで門を競う程に見受けられた各国の援助団体も今では殆どが撤退し

たそうです。世の耳目が他に移つても、JAMSでの医療活動は地道に続けられています。現地の様子も世の中も刻々と変わりつつあるけれども、「現地から」という変わらない視点に支えられ、ペシャワール会は彼の地の応援を続けて十年になります。当初は小さな活動でしたが、少しずつ支援の輪が大きくなってきています。地道にでも、続けることがやはり大切なことのように思えます。その中に多くの何かを見つけられたように感じます。

唐代の詩の一節に「……千里の目を窮めんと欲して、更に上る一層の楼」とあります。アフガンの和平と復興が本格化しようとする中、JAMSの医療活動も私たちの支援も新しい展開への入口にさしかかっているようです。

時には少し高いところから見つめ直して、これからの支援を進めていくことが求められているようです。

● 継続的支援

香住ヶ丘バプテスト教会

福岡YMCA

遠き隣人に想いを馳せて

香住ヶ丘バプテスト教会 藤井健児

月並みな言葉ですが、月日のたつのは
本当に早いものです。一九八四年五月二
〇日の日曜日、間もなく日本基督教海外
医療協力会の派遣医師としてパキスタン
のペシャワールに送り出す中村医師とそ
の御家族も一緒に礼拝と、壮行会を持つ



カブールから逃がれてきた羊飼いの少年

たのがつい昨日のこのように思われま
す。でも、あれからもうすぐ十年目に入
ろうとしています。

もちろん、その間の現地における並々
ならぬご苦労は察して余りあるものです
が、多くの方々の絶大なご支援のもと、
地道な働きが着実に進められております
ことを心から嬉しく思っています。

さて聖書にはしばしば「自分を愛する
ように、あなたの隣人を愛せよ」と教え
られています。隣人といえは、まず、
文字通り、近くにいる人、取りわけ自分
の利益のために、近い人を考えるもので
す。

しかし、イエスキリストは聖書の中の
「良きサマリヤ人の譬話」を通してその
反対のことを語っておられます。

強盗に遭って半死半生の目にあわされ
たユダヤ人の旅人を見ず知らずの、しか
も、もともと不仲のサマリヤ人が真心か
ら介抱するという話です。

ここに示された隣人とは、「身近に助
ける機会が与えられている相手」言いか
えれば、「相手の利益のために係わりを
もつ近くの人」ということです。

中村先生はスタッフの者には大変厳し
いが、患者さんには本当に甘いという声
がよく聞かれますが、中村医師はもとよ
り、現地の皆様のお働きはまさしくそれ
であります。そして、こちらにいる私達
もたとえ距離は遠く隔てていまして、
第一線の働き人を掛け橋としてパキスタ

ン、アフガニスタンの人々との良き隣人
となりたいと切に願っております。

ペシャワール会の生命 いのち

福岡YMCA 志満秀武

一九八三年に発足したペシャワール会
は、既に十年を経過し、その発足時に比
し、活動の質量共に大きな拡がりをみせ
ています。これは、中村哲先生のもって
いる「本物の働きとその不思議な魅力」
を中心に、多くの事務局スタッフ、会員、
関係団体のご協力とご支援によるものと
いえます。

考えてみますと、私もこの会発足時に、
佐藤誠さん、故佐藤雄二さんより、事務
局をYMCAの中(旧大名のビル)にお
きたいとの申し出があり、前任者の小林
省三さん(現広島YMCA)と共に、そ
の申し出をうけ、YMCAが事務局の一
端を担おうということから関わりがしま
ったのであります。

その後、YMCAは大名より天神三和
ビルへの移転、七隈での新会館の建設、
博多ブランチの開設等があり、私自身の
ペシャワール会との関わりもすつかりう
すくなってきました。YMCAとしては、
天神ブランチの中に、メールボックスを
置く程度のご協力しかできていず、苦し
く思っています。

この会発足より本当に貢献頂いた佐藤
雄二さん、新貝勲さんへ元、福岡登高会



ミッション病院の靴職人さん

会長は、故人として、今は天にあって
この活動をみまもっておられます。名物
二人の辻さん、沢田さん、梶原さん等
は発足時より事務局スタッフとして今日
まで会の運営に力を尽して頂いています。
岩橋先生、問田先生、YMCAの森さん、
江頭さん、名古屋のライオンズクラブの
皆さんと実に多くの方々が今日まで、支
えて頂いています。

これは、先述した通り、このペシャワ
ール会の働きが「本物」の働きであり、
今日の、特に日本の中にもみられる傲慢さ
・国際化、国際協力の中味の陳腐さと、
断じて異なる、「本物の生命」にあると
思っています。

ペシャワール会に連なることを通し、
私達一人一人がそれぞれの働きの場で、
この生命を継承していくことが問われて
いると思います。私もまた、改めてこの
会的一端を少しでも担っていきたく願
っています。

会員の皆さんからのお便り

*亡くなった母は、昭和二十年から二十一年まで一年間、旧満州の奉天で難民として過ごしていましたし、父はシベリアで四年間捕虜として抑留されました。子供の頃から当時の話を繰り返し聞かされてきましたが、日本では引き揚げ者などと言っていました、これはまさしく難民です。満鉄の社員だったから誰も恨めないとは思いますが、私も難民の家庭に育つ可能性も十分にあったと、ふと思うこともあり。宗教や信条は別にして人間として助け合いたいと思います。

(東京都 S・J 女)

*子供・家庭から少しずつ解放され、心の余裕ができてきた現在です。今からが社会に還元すべき時と考えます。そして自分にできることから何かを、と思ってきました。

(福岡県 K・Y 女)

*還暦を祝い、神様の恵みに感謝しての献金です。

(福岡県 J・H 女)

*会報入手。御苦労さまです。現地の地図などがはいると、もっと身近なものになりそうです。

(北九州市 Y・N 男)

*お忙しい中での会報作り、御苦労さまです。現地の様子を知ることができ、大切なものをいただいた気持ちになります。

(小平市 R・H)

*わずかな節約を、こんなに良いお仕事に役立てていただけると、とても嬉しいことです。会報もとても充実していて、楽しみです。

(富士宮市 K・H 女)

*今年も会費を払うだけしかできない立場ですが、よろしく願います。藤田さんからの手紙の内容が、ずっと心に響いています。「生命の重み」の最前線の彼女の思いを、私にも届けて下さることに、感謝いたします。

(東京都 M・S 女)

*中村哲君の同級生です。哲ガンバレ!!

(福岡市 T・N 男)

*会報を読み、長期にわたりペシャワール会が少しずつ積みあげてきたもの大きさを感じ、感慨深い気持ちになりました。

(太宰府市 N・M 女)

*中村先生のお話を、ふくおか自由学校で聞かせていただき、気分はず構えず活動していただける姿に、感動しました。

(福岡県 浮羽郡 M・S 女)

*小さな宿をしています。お客様からの募金と合わせて送らせて頂きます。

(大分県 A・F 女)

*先日家族で旅行をしたら、出費が予定より少なくてすみしましたので、年末募金に協力させて頂きます。

(宇都市 S・K 女)

*会報(34号)の七ページを読んで、僕の良心の満足ではなく責任について考えなければならぬことがわかりました。生意気ですが、今の自分ができるのは、「頑張る」と言うことです。

(福岡市 Y・A 男)

*果たして自分に何ができるか、というのは疑問ですが、何もせずに手をこまねているのには耐えきれないので入会しようと思えました。

(福岡市 A・S 男)

*医者になったら、もっと入れますから、今回はこれでカンベンして下さい。

(国分寺市 K・T 男)

*二月とはいえ、もう風はすっかり春めいていて、驚きとうれしさで一杯の今日この頃です。ペシャワール会の皆様にも素敵な春が訪れますように、お祈りしています。

(熊本市 Y・S 女)

*中村先生のお話やスタッフの方々の活動の様子をうかがう時、なにかしら自分



JAMSの中心に朝早くから並ぶ患者さん



の足もとに目をやり、地に足のついた生き方をしているかと問いかけています。

(宇部市 E・T 女)

*主婦のグループ伊勢原ホームサービスタで集めました。

(神奈川県伊勢原市 T・A 男)

*最近山に魅せられています。いつかヒズノクックシユ山並みを間近で見れたらと思っています。(摂津市 Y・S 女)

*皆さんへの協力が金銭でしかできないことを残念に思いますが、少しでも協力したい気持ちをこめて寄附させていただきます。(宗像市 R・Y 男)

*先日事務局におじやました者です。皆さんの地道でひたむきな姿に、頭の下がる思いで帰路につきました。只今新しい出発のため、せつせと働いております。また水曜日の夜、お伺いするかもしれませんが、その時はよろしく。

(滋賀県 H・T 女)

*『ペシャワールにて』を読みました。両親は既に会員になっていますが、この本を読んだ後、あまりお役に立てなくて

も、自分自身が会員にぜひなりたいたい、と思いました。よろしくお願いします。(福岡市 A・F 女)

(福岡市 A・F 女)

*『ペシャワールにて』の本を読ませて頂いて、途中ですけれど心が痛み、少しでも協力ができたらと思ひまして、心ばかりですが役に立てて頂ければ幸いです。ごさいます。頑張ってください。(八幡西区 J・G・女)

(八幡西区 J・G・女)

*ペシャワール会も十年たったのですね。しかしまだまだ、これからも続けていかねばならないようで、皆さんも大変でしょうががんばってください。(福岡市 H・M 男)

(福岡市 H・M 男)

*娘三人活動に賛同致します。(福岡市 S・F 男)

(福岡市 S・F 男)

*会報を読み中村先生やワーカーの方々の困難に自分の中でつぶれてしまいそうな勇気や良心というものを呼びさまされます。私の元気の源でしょうか。藤田さんガンバッテ!!(横浜市 N・K 女)

(横浜市 N・K 女)

*中村先生の無手の強さ、これは強い人類愛です。藤田さんの手紙、本当に切なくて胸が痛みました。(長崎県 N・T 女)

(長崎県 N・T 女)

*NHKインタビューでの中村先生のお話に感動しました。老人で年金生活者の一人として、わけへだてなく会員として考えています、という一言には思わず涙が出ました。現地で活動している皆様に

合掌します。(東京都 S・M 男)

(東京都 S・M 男)

*NHK日曜インタビューで、中村哲氏、ペシャワール会のことを知りました。感動してささやかなお手伝いをさせていただきます。時々わずかな寄付をさせていただきます。(熊本県 C・M 女)

(熊本県 C・M 女)

*昨年放送された中村先生の番組拝見しました。初めて見るらしいの患者さんの様子、驚きもありましたが、いつも会報でお話をうかがっていましたので何だかとても近く感じられました。(熊本市 Y・S 女)

(熊本市 Y・S 女)

*テレビドキュメンタリー(テレビ朝日)を見ました。私も裏切らずにずっと応援します。(北九州市 T・N 女)

(北九州市 T・N 女)

*先日、NHKで再放送された日曜インタビューでの中村先生のお話を聞き、大変感動しました。私も世の中の人のお役に立ちたくて、四月から看護学校へ通う予定です。これから、わずかですが協力させて頂きたいと思っております。(東京都 T・A 女)

(東京都 T・A 女)

*シヨヒラテイ氏の演奏会で、ペシャワール会の具体的な活動がわかりました。よろしくお願いします。(前原市 S・H 女)

(前原市 S・H 女)

*先日、シヨヒラテイさんのコンサート、とても楽しませていただきました。またこのようなイベント、どんどん企画して下さい。貴会ますますの発展、お

祈り致します。(福岡市 N・T 女)

(福岡市 N・T 女)

*シヨヒラテイさんのコンサートで、この会の活動を知りました。わずかですがお役に立てて下さい。(福岡市 M・T 女)

(福岡市 M・T 女)

*藤田さんの手紙を家族で読み、ずいぶんしんどい思いになりました。頑張ってください。(福岡市 T・N 男)

(福岡市 T・N 男)

*藤田さんの手紙は、言葉で言い表せない重いものでした。ああいう世界があることに、めまいすら覚えます。その現場で活動されている藤田さん達の御苦労は大変なものでしょう。(熊本市 N・M 女)

(熊本市 N・M 女)

*中村先生、藤田看護婦さんのお便り、じっとしておれない思い、でも何もできないこと申し訳なくおゆるして下さい。(札幌市 S・T 女)

(札幌市 S・T 女)

*藤田さんからの手紙を読んで感動し、日本人として現在の生活に感謝の他ありません。老女のささやかな気持だけの募金です。(福岡県鞍手郡 F・Y 女)

(福岡県鞍手郡 F・Y 女)

*今回の会報に同封されていた藤田さんからの手紙でこういう現場の人の声を会員ひとりひとりにコピーして届けようという事務局の姿勢をとってもられしく思いました。問題を現場のひとりだけの問題とせず、会員すべての問題としてとらえている姿勢がとても好ましいです。(瀬戸市 K・K 女)

(瀬戸市 K・K 女)

●事務局だより

*昨年度は、財政的にはホントに綱渡りでした。「戦術的には細心、戦略的には大胆に」と言いつつ曲芸なみのハラハラ歩行でしたが、会員・支援グループの力強いバックアップで乗り切れました。ありがとうございました。網渡りの財政難は続きますが、現地プロジェクトは困難を伴いつつも着実に展開しています。国内の第二診療所もドラエヌールにオープン、もう後には引けません。

*10周年記念のシヨヒラティ・トルソンコンサルタントも成功裡に終わり、収益で事務局に新しいコンピュータも購入しました。ご協力ありがとうございました。

*10周年記念総会

7月31日(土)午後2時〜6時
福岡市民会館・小ホール

特別ゲスト シヤワリ医師 (JAMS 院長)

●懇親会 夜7時〜 於ガーデン・パレス

(詳細は後日連絡。予定に入れておいて下さい。)

*中村先生の帰国報告会をご計画のグループは事務局までお知らせ下さい。期間は7月〜8月です。

〔◎村から〕

◆事務局に遊びに来始めて、もう半年がたちました。大学生の私にとってこの場所は他ではなかなか見つけれない不思議な味がして、かといって「うっ」と口を閉ざしてしまうのではなく、どんどんつまみ食いをするように、心を魅きつけられてしまうのです。つまらない大学の先生の話を聴くより、ずっと事務局のみなさんの身をもった体験談をお酒を交えながら(??)心にためて興味を持っていく方が、自分合ってるなあ。(みかけ)

◆事務局に手伝いに来るようになって、はや1年余り。毎回、皆さんが持つてこられる差し入れを楽しみにしています。今日もHさんの持つてきた桜の枝のもと、Oさんの差し入れのドーナツを口一杯頬張る始末。

おなかにまだ余裕のあるときには、二次会として一宝軒が待つています。ここのキムチライスは、お勧めの一品。

今日もそろそろ一宝軒に行くようである。腹一杯になって帰ることになった。 少年A (学生)

ペシヤワールにて [増補版]

癪そしてアフガン難民

中村哲 四六判上製 定価一八五四円
パキスタン・アフガンの地で、らいと難民の診療に従事するひとりの医師が、高度消費社会を生きた私たちが日本人へ向けて放った痛烈なメッセージ

石風社

福岡市中央区大名二丁目十五
電話 〇九二(七二四) 四八三八

アフガニスタンの

診療所から

中村哲 B6判並製 定価一〇〇〇円
国連や欧米NGOが撤退する中、アフガン入スタッフと共に国内診療所を開設するまでの苦闘の記録。国際協力のあり方を根底的に問う。

筑摩書房

東京都台東区蔵前一六四
電話 〇三五六八七二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名二丁目一〇一
二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二
三七二) 内におく。